

主日の福音 2025/5/25(No.1357)



復活節第 6 主日 (ヨハネ 14:23-29)

どこに、御父と御子を住ませる部屋を用意しますか

今週の福音朗読は先週月曜日の福音朗読と重複していて、月曜日に考えたことを元に話したいと思います。私たちが声をかけてもらうのに、通りすがりの人や遠くににいる人に声をかけてもらうより、一緒に住んでいる人に声をかけてもらうのがよりきめ細かいのは至極当然なことです。

私は六年ほど前に大腸ポリープを四つ切除してもらったことがあります。ポリープを疑ったのは前任地の司祭館で働いてくれた方でした。日常生活でのちょっとした変化に気付き、「大腸検査をしてください」と強く勧められたので、発見に至りました。命の恩人です。

皆さんの周りでも、同じようなことは起こっているでしょう。その経験を元に今週の朗読を読むとき、「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む」(14・23)は「そういうことか」と納得できるのではないのでしょうか。

御父と御子が、一緒に住んでくださいます。一緒に住んでくださっている御父と御子が、聖霊の導き・照らしを与えてくださるのです。私たちに照らしと導きを与えるのに、通りすがりの人でなく、遠くにいてもなく、一緒に住んでおられる方が声をかけてくださるのです。これほど安心できる導き手が、他に考えられるのでしょうか。

「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」(14・26) 私たちはこれまで、聖霊の働きを遠くで起きている出来事のように考えていたかも知れません。それが、すでに日常生活の中で、最もそばにいてくれる人が誰よりも的確に助けてくれる体験と実は重なるのだと知ったとき、聖霊の働きはより身近に感じられ、信頼の気持ち湧くでしょう。

ただし、御父と御子が住んでくださる私の中の住まい、聖霊の働く住まいが、私にとって頻繁に行き来する導線に置かれているのか、めったに近づかない場所なのかによって、導きも違ってくるはずです。当然、頻繁に行き来する場所に置かれる必要があります。

たとえば俗っぽいですが、朝鮮ドラマを観ていると、王様は王宮の中に住み、王妃の他にも側室がいたりしますが、側室の中にはお声もかからず訪ねてももらえない立場の方もドラマでは登場します。同じ王宮の中に住んでいても、王が頻繁に通る導線に置かれていなければ、それは王宮に住んでいないのも同じことです。

私がイエスのことばを守って生きるため、イエスの愛に生きるため、御父と御子は私の中に住んでくださり、聖霊の照らしと導きをくださいます。その声が、喜ばしい声としていつも聞こえている。そんな状態を保ち続けたいものです。耳障りだから遠くに追いやる、邪魔な扱いをする。そんな暮らし方を選ぶべきではありません。あなたは、どこに御父と御子を住ませる部屋を用意し、その声に耳を傾けますか。

主の昇天(ルカ 24:46-53)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。